

———. & G. Wiegleb. Two new *Potamogeton* hybrids from Japan. Journ. Jap. Bot. 62: 73-78.

○A. Hattori ed. "Studies on Dynamics of the Biological Community in Tropical Seagrass Ecosystems in Papua New Guinea: the Second Report" (March 1987, Ocean Research Institute, University of Tokyo, 121p.)

東大海洋研究所が中心になって進めている表記のプロジェクトの第2次報告書。海草の優占する熱帯域の生態系の研究は今まで少ないようで、このプロジェクトでは無機環境から生産、消費、分解までの全ての側面について、基礎的な研究が進められている。海草の生態を直接扱った報文としては次のものがあげられる。

Aioi, K. & Y. Yokohama. Growth and standing crop of seagrasses.

Mukai, H., S. Nojima & M. Nishihira. Seagrass coverage and distribution in Loloata

seagrass bed.

Aioi, K. & Y. Yokohama. Photosynthetic activity of seagrasses and epiphytes.

Koike, I., K. Fukami, K. Aioi & A. Hattori. Growth of *Thalassia hemprichii* rhizomes.

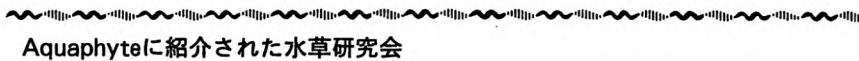
Iizumi, H. Nitrogen fixation in a tropical seagrass bed as measured by Acetylene reduction.

抄録 J. Aquat. Plant Manage. (Vol. 24, 1986)

(前号のつづき)

○Influence of Allelopathic Chemicals on Sprouting of Hydrilla Tubers (D. L. Sutton)

クロモの塊茎の出芽に対する11種のアレロパシー物質の影響を、それぞれの濃度を変えて調べたもの。サリチル酸を除いてはすべて1,000ppm以上の濃度でなければ効果がなかったため、クロモの実際的な管理におけるこれら物質の有効性はかなり限られたものと考えられる。



Aquaphyteに紹介された水草研究会

AQUAPHYTE

SUMMER 1986

PAGE 7

WATER PLANT SOCIETY OF JAPAN

The Water Plant Society of Japan was founded in 1980 for promotion of scientific research, exchange of information and propagation of the knowledge of water plants. The society has about 240 members including professional researchers, amateur botanists and general fanciers of plants. The society's interests include the study of taxonomy, ecology and physiology of water plants, weed control, utilization of water plants as class materials in schools, environmental conservation and cultivation for ornamental purposes.

The Society publishes the Bulletin (in Japanese) quarterly. The bulletin contains reports of studies, reviews of current topics, essays and lists of publications on water plants which appear in Japan.

Annual membership fees are 2,500 yen. For more information, write to Dr. Yasuro Kadono, Secretary, Water Plant Society, Department of Biology, College of Liberal Arts, Kobe University, Nada, Kobe 657, JAPAN.

水草研究会会報

19号 (1985年3月)

— 目 次 —	
太田 謙雄：浮葉—その形態と生態	2
角野 肇郎：兵庫県姫路市地方の水生植物誌記(1)	9
藤井 秀伸・中村 加代子：大型のスプタに関する報告	11
中沢 信平：徳島のカキツバタ原生地	12
角野 肇郎：徳島県にトゲネズミノフサ	13
下がツツバメとコウガイモの混生に及ぼす影響	13
文献リスト、他	

Bulletin of Water Plant Society, Japan

No. 19 (Mar. 1985)

水草研究会

○Effect of Leaf Hardness on Penetration of Waterhyacinth by *Sameodes albiguttalis* (A. D. Wright and A. S. Bourne)

S. albiguttalis (鱗翅目, メイガ科) はホテアオイの生物的防除因子として1977-1978年にオーストラリアに放された昆虫である。この研究はこの蛾の幼虫の葉柄内への侵入がホテアオイの表皮組織の固さによって影響を受けているのではないかという仮説を試すために行われたものである。観察の結果、表皮の固さと侵入の成功率の間には負の相関がみられたが、他にもクチクラ層の厚さや表皮細胞中のフェノール含有量なども原因のひとつと考えられた。

○Productivity of Major Indian Aquatic Macrophytes (S. C. Saha)

インドのバガルプール州の2つの池で1982年11月から翌年10月まで、月ごとに水生植物の現存量を測定した。6種の植物の季節的現存量は〔表には月ごとの現存量が載っていたが省略する〕、アカウキクサ $69.2\text{g}/\text{m}^2$ (2月)、ホテアオイ $188.9\text{g}/\text{m}^2$ (9月)、ヒシ $29.1\text{g}/\text{m}^2$ (6月)、マツモ $46.3\text{g}/\text{m}^2$ (10月)、クロモ $155.6\text{g}/\text{m}^2$ (5月)、エビモ $84.7\text{g}/\text{m}^2$ (5月) だった。(国井秀伸)

ウキクサ科の標本

角野康郎

ウキクサ類は、もっとも身近にありながら、もっとも標本にされることの少ない水草である。植物誌作成のために意識的に標本を集めている県もあるが、大きな標本庫でもジーンズ・カバーの中に標本が数枚しかないという例が珍しくない。これでは分布図ひとつ作ることができない。実は、私自身もウキクサ科となると気の向いたときにしか標本を作っていないので大きなことは言えないのだが、その反省もこめてウキクサ類の標本作りについて、少々書きとめておきたい。

ウキクサ類の標本を作るには、ふつつ、現地あるいはポリ袋に入れて持ち帰ったあとバットなどに浮かせた状態で、適当な紙ですくい上げ、それを新聞紙にはさみ、以後は通常の標本作りと同じ手順で行なう。すくい紙としては、ろ紙をよく使うが、新聞紙や雑誌の切れ端で十

分である。これだけのことがなかなかできないのだから、やはり自覚の問題かと思うのだが、その自覚を促すためには何らかの目的をもつのも一案かと思う。例えばある地方のウキクサ科フローラ、分布図の作成というふうに。全国レベルでみても、コウキクサの分布状況など正確なことはほとんど判明していないのではないか。特定の地域(〇〇市、〇〇郡)に限ってでもウキクサ科の分布に関する正確な情報が得られることは貴重である。たとえウキクサとアオウキクサしか分布しないという事実の確認であってもである。自分ではそこまでやる気がないという方は、標本を専門家へ送ればきっと活用してもらえるであろう。それほどに資料が足りないのである。

ちなみに、アメリカのHaynes (1984) はウキクサ科の標本の作り方について自分のやり方を述べているので、簡略に紹介しておこう。ウキクサ類を見つけたら、茶こしまたは小さな布網(熱帯魚店で売っている)ですくい、それをまず50%アルコールの入ったサンプルびん(250cc)に入れて持ち帰る。いつもアルコールを3分の1ほど入れたポリびんを25~30本もち歩いていて、現地の水を加えて適当な濃度にするという。こうすると数週間はそのまま置いておける(実際にはもっと長くもつと思うが、できるだけ早く片付ける習慣をつけるべき)。葉緑素は溶出するが、同定に必要な形質は全て残る(アントシアン系色素の有無は採集時に記録する必要があると思う)。

持ち帰ったあとは、まず同定してから標本にするという。これは私も見習いたいこと。乾燥してちぢんだものより原形そのままの方が同定は容易で誤りも少ないだろうからである。

標本を作るときは新聞紙にはさまず、インデックス・カード(図書カードのようなもの?)の上にウキクサをのせ、それらを束ねて太目の輪ゴムでとめる(吸取紙としては、同じ大きさの紙をはさむのであろうか)。これがちょうど良い押え具合になるという。乾いた後の保管は、こうして準備されたカードを封筒あるいはコケ標本に使うような包みに入れて台紙にはさむことである。

私自身は、標本乾燥後、ウキクサ類をすくった紙ごと封筒に入れ、その上にラベルを直接貼っている。一応、その封筒を台紙にはっているが、ウキクサ類のコレクションをつくるのであれば、台紙にはらずに封筒のまま保管の方が使いよいかもしれない。